

30. ミドリハコベ（ナデシコ科ハコベ属）

Stellaria neglecta Weihe

2015年3月

路傍や田畑の畔などに見られる軟らかい越年草です。茎は下部から多くを分枝し、茎下部は匍匐し、上部は斜上して広がります。高さ 10～30 cmほどで茎の片側に軟毛があります。葉は対生し淡緑色の広卵形～長卵形で先は尖り、長さ 15～25 mm、幅 10～15 mmです。下部の葉は柄があり上部の葉は無柄で、ほぼ無毛です。花は 3～5 月に多く、集散花序状につき、花後は下を向きます。花弁は 5 個、2 深裂でがく片とほぼ同長です。雄ずいは 5～10 個、花柱は 3 個、果実は卵形で 6 裂です。種子は径 1.2～1.5 mmの円形で、尖ったいぼ状突起が顕著に見られます。分布は日本を含むアジア、ヨーロッパ、アフリカの温帯から亜熱帯に広く生育しています。姫路市においては市街地や民家近くよりも、比較的自然度の高い里地に見ることができ、いたるところにあるようなものではありません。類似種にコハコベ (*Stellaria media* (L.) Villars) があります。春の七草のひとつ「ハコベラ」はミドリハコベとコハコベを指します。コハコベはミドリハコベによく似ていますが、コハコベは明治時代にヨーロッパから日本に入ってきた外来種といわれ、一方、ミドリハコベはもともと日本に生育していた種類といわれます。コハコベは市街地や民家近くに多く、人為攪乱の多い環境を好むようです。両種の違いは茎の色がコハコベは赤紫色でミドリハコベは緑色で、葉はミドリハコベが大きいことです。また、種子の大きさや突起の状況で区別でき、コハコベはミドリハコベより小さく、また、種子表面の突起が小さいことです。両種とも全草は繁縷（はんろう）という生薬で、利尿、浄血作用があるとされます。



ミドリハコベ



コハコベ